

7. ヴァスコ・ダ・ガマ

ポルトガルの大航海時代を切り開いた生みの親はエンリケ航海王子である。しかしながら、その大航海時代のプロデューサーが生みだした舞台に立った、最初で最大の立役者は何と言ってもヴァスコ・ダ・ガマだということに異論を唱えるポルトガル人はいない。香辛料など東洋からの交易品を満載したこの男の船がテージョ川の水平線に姿を現わし、リスボンに帰ってきた時から、大航海時代が始まり、ポルトガルの繁栄が始まったのだ。

エンリケ航海王子は14世紀終わりの1394年に生まれ、1460年にもう一つの地の果てサン・ビセンテ岬近くのサグレスで亡くなっている。王子が亡くなったその年にヴァスコ・ダ・ガマは生まれている。エンリケ航海王子についても話したいことは山ほどあるが、それはポルトの彼の生家に行ってからにしたい。



1524年、インド西岸のコチンで亡くなったヴァスコ・ダ・ガマの遺骸は、国王の命令で本国に運ばれ、大理石造りの荘厳な棺に納められ、リスボンのベレン地区にそびえるサン・ジェロニモス修道院の礼拝堂に安置されている。壮大な修道院そのものがヴァスコ・ダ・ガマのために大改修されたようだ。「幸運王」と呼ばれた時のポルトガル王マヌエル1世は、その彼の幸運をもたらした最大の功労者であるヴァスコ・ダ・ガマに、この壮大な建築物を捧げることで報いたかったのだろう。

ヴァスコ・ダ・ガマはインド航路の発見者ということになっているが、実はアフリカ西岸から喜望峰までの航路は彼の出発前に既に確立していた。1488年に喜望峰まで達した最初のポルトガル人はバルトロメウ・ディアスという男である。但し、彼自身はこのアフリカ最南端の岬を単に「風の岬」と名付けて帰ってきた。喜望峰という名前を付けたの

は彼の報告を聴いた、時のポルトガル国王ジョアン2世である。「そこからさらに西に向かえばインドに到達できる希望の岬」ということで「喜望峰」というわけである。

ヴァスコ・ダ・ガマがインドに到達するのは1498年、リスボンへの帰還は1499年である。エンリケ航海王子が最初にアフリカ西岸の探検を命じた1419年からインドまで、行きは約70年もかかり、喜望峰からインド洋を渡りきるまでも実に10年も費やしている。それなのに帰りはたったの1年である。その間、1493年にはスペインがコロンブスによって西インドに到達したというビッグ・ニュースが飛び込んだ。ポルトガル王室はさぞかし慌てたことだろう。そこで、それまでの50トンクラスの外航用カラベラ船ではなく100トンから120トンもあるナヴィオ型（もしくはナウ型）船を建造し、この船でインドを目指すことになった。現在でも大型船（現代では数万トン以上の船も出現しているが）の総称として、このナヴィオという言葉が使われている。

1497年7月8日土曜日、大勢の見物人の見守る中、2隻のナヴィオ型大型外航船と2隻の随行船を従えて、王宮前の岸壁を離れたという。さらにもう1隻のナヴィオには喜望峰までの案内ということでバルトロメウ・ディアスも同行し、総勢5隻という当時としては大艦隊の出航の威容に、リスボンっ子も大騒ぎしたことだろう。

ヴァスコ・ダ・ガマの成功によって、時の国王マヌエル1世は「幸運王」と呼ばれることになった。マヌエル1世は義理固いポルトガル人気質の人だったらしく、自分に幸運をもたらしたヴァスコ・ダ・ガマに最大限の恩賞を与え、それだけでは足らぬと思ったのか、ヴァスコ・ダ・ガマの死後、彼の棺をベレンにある白亜の大寺院に納めさせている。



1502年に王の命令で建設が始まったジェロニモス修道院だが、現在の規模で建設が完工したのは19世紀に入ってからという。キリスト教の宗教施設建設にたいするヨーロッパの人々の時空スケールには驚くほかない。石造りの建物だが、初めに建設を命じたマヌエル1世時代の建築様式マヌエル様式特有の優美な姿は女性的でさえある。

その大寺院が世界遺産ジェロニモス修道院である。テージョの川面から眺めると白い小山かと思えるほど偉大な建造物だが、実際に接してみると温かみさえ感じることができる不思議な建物である。1502年に、それまでの小規模な修道院に手を入れて、王家の廟所にふさわしい建造物にするよう命じたのも、マヌエル1世で、彼自身もこの寺院に眠っている。

主要な建材である白大理石は何処から集めてきたのかは分からないが、莫大な費用を費やしたものであることだけは想像できる。時を経た白大理石はまるで夫人の肌のように柔らかく暖かみのある光を放っている。

内部は迷子になりそうなくらい大きく複雑である。総大理石造りという石の柱や壁であっても、長い長い時間、人の手で触られ続けるとこんなにも人の血を通わせるようになるのかと、わたしは感動した。この日はどこまでも澄んだ青空の広がる日だったが、パティオ（中庭）に降り注ぐ光さえもが柔らかくてやさしかった。わたしは今度来る時は、



ジェロニモス修道院の礼拝堂はとにかく大きい。この礼拝堂の祭壇とは反対側にヴァス・ダ・ガマの大理石製の棺が安置されている。彼の棺には彼の功績を象徴するナヴィオ型の外航船のレリーフが彫られている



修道院は回廊式になっている。マヌエル様式で装飾された柱に囲まれたパティオは、回廊とは対照的に、幾何学模様植えられた芝生と真ん中の噴水だけというシンプルな美しさを見せている。

冬に西岸海洋性気候特有の冷たい雨の降るに来てみたいと天邪鬼なことを考えていた。天正遣欧使節の4人の少年達もここには来ている。その時の彼らの感想をわたしはまだ読んでいない。想像するしかないのだが、圧倒的な大きさと自分達をやさしく包み込んでくれる建物を通して、いよいよキリスト教という宗教とその神へと傾倒していったであろうことは間違いあるまい。

ヴァスコ・ダ・ガマの知名度はコロンブスやマゼランの後塵を浴びているが、ヴァスコ・ダ・ガマをはじめポルトガルの航海者たちの功績はむしろ彼等よりも大きい。世界が限りあるものではなく、西回りでもインドに辿り着くことが出来るのだと、船乗りたちに確信させるようになるには、エンリケ航海王子から始まったポルトガル人達の冒険心が、なくてはならないものであったのだから。

しかし、大航海時代のヨーロッパ世界の拡大がその後のアフリカやアジア、中南米の側から見て良かったことかと言えば、答えは「ノー」であろう。コロンブスはともかく、その後のピサロやコルテスのやったことは勿論だが、我々がヴァスコ・ダ・ガマも喜望峰以東の彼の足跡には、硝煙とイスラム教徒の血の臭いが付きまとっている。彼に入港された側にしてみれば、浦賀沖に現れたペリーが突然火ぶたを切って砲撃を始めたようなものであったはずである。彼の豪勢な棺を見ながらわたしの思いは複雑にならざるを得なかった。